

# ふくさの使い方

**ふくさとは**..... お祝い事やお悔やみの際の金封は、ふくさに包んで持参するのが礼儀になっています。ふくさを使用することで、持参する途中で水引のくずれや、袋がシワになることを防ぐことができます。また同時に、喜びや悲しみを共にするという日本独特の礼儀を重んじる意味合いもあります。ふくさに包むことによって、贈る相手へ想いを伝えるという文化なのです。

## 知っておきたい冠婚葬祭のマナー

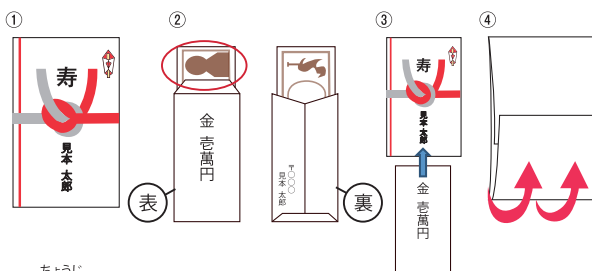
※地域や宗教により、表記等異なる場合がございます。

### ◆ 祝儀・不祝儀袋の出し方

- (1) 金封(祝儀・不祝儀袋)は、ふくさに包んで袴や上着の懐に入れ持参し、受付の前で、ふくさごと袴や懐から出します。
- (2) ふくさの上に、金封を乗せ、金封の向きを相手から見て正面になるよう変えます。
- (3) ふくさに金封を乗せた状態で、両手を添えて受付係に金封を差し出します。※待ち時間に余裕がある場合は、ふくさを袴や懐に入れてしまい、金封のみで差し出しても構いません。

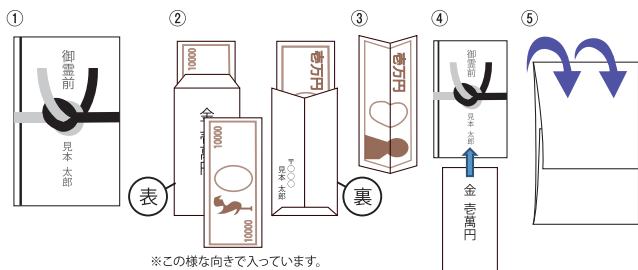


### ◆ 慶事の場合



- ① 祝儀袋の場合、濃い墨で太く書くことにより「幸せが長く太く」という意味合いがあります。
- ② 一般的に肖像画が上にくるようお金を入れます。※お札は、上下・裏表を全て揃えて入れるようにしてください。
- ③ 上包の表と中袋の表が、同じ向きになるように入れてください。
- ④ 下から上へ折り畳みます。

### ◆ 弔事の場合

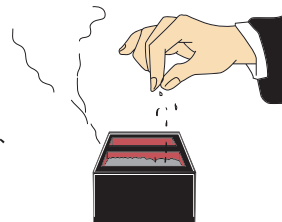


- ① 不祝儀袋の場合、「涙で墨が薄れる」という意味から細く薄い墨を用います。
- ② 顔を伏せるという意味から、お札の裏が表に向くよう入れます。※お札は、上下・裏表を全て揃えて入れるようにしてください。
- ③ 通夜や葬儀に包む香典は、新札を用いるのはマナー違反です。新札しかない場合は、縦に1本折り目を付けます。
- ④ 上包の表と中袋の表が、同じ向きになるように入れてください。
- ⑤ 上から下へ折り畳みます。

### ◆ お焼香の流れ

お焼香とは、仏や故人に向けて香を焚いて拝むことを言い、仏教における供養のひとつです。※仏教ではそれぞれ宗派があり、焼香のやり方も細かい部分は異なりますが、基本的な部分は同じです。

- (1) 自分の順番が来たら席を立ち、焼香台の前まで移動します。
- (2) 遺族に一礼し、焼香台に一歩近づき、遺影に向かって一礼します。
- (3) 宗派ごとに定められた回数だけ焼香を行います。
  - ① 右手の親指・人差し指・中指の3本で抹香をつまみ、額の高さまで上げ(「おしいたぐ」といいます)、指をごすりながら香炉に落とします。
  - ② 合掌して一礼します。
- (4) 遺族に一礼し、自分の席へ戻ります。



### ◆ 色・柄の選び方

#### 慶事(けいじ)

朱色・ピンク・黄色  
華やかな刺しゅう(花や鶴)

#### 弔事(ちようじ)

グレー・利休(緑)・暗めの色

#### 両用

紫・濃紺 無地

※無地の紫色は慶弔兼用、なおかつ男女兼用色です。

### ◆ 柄のいろいろ 柄の意味を知ることを楽しむのひとつです。



#### 鮫小紋 (さめこもん)

江戸時代の代表的な小紋柄の一つ。鮫の鱗のように、小さな点を一面に染め抜いた型染の模様です。



#### 麻の葉 (あさのは)

麻の葉を圖案化した小紋柄。麻は丈夫で成長が早いので、おめでたい模様とされ、産着(うぶぎ)の柄にも用いられています。



#### 七宝 (しっぽう)

仏教の言葉で、七つの宝物を表しています。どの方向にも限りなく延びて「繋がる」縁起の良い模様です。